

近

世



『武庫連山海陸古覧』より（神戸市立中央図書館所蔵）

元和元年（一六一五）大坂夏の陣で豊臣家が滅亡すると、この地方は江戸幕府によって元和三年（一六一七）尼崎藩主の戸田氏鉄に与えられた。次いで寛永十二年（一六三五）に青山氏、宝永八年（一七一）に桜井氏が尼崎藩主となるが、常に同藩領とされた。当時このあたりは農村で、村人は鎮守の社で豊作を祈り、また春に田に降りて稲にみのりをもたらし秋には山に帰るといふ山の神への信仰もさかんだ。東灘東部の山中には、今も山の神の石祠が数多く残っている。時に干ばつの夏には人々は、六甲山頂の石宝殿へと雨乞いに登った。村毎に檀那寺があつて村人の信仰生活を監視し、庄屋がいて人々を治めていた。野寄の高井家や、郡家の平野家は、いくつもの村を統括して支配する大庄屋であつた。

明和六年（一七六九）に幕府は、深江・青木・中野の一部・西青木・横屋・魚崎・田中・住吉・御影・石屋・東明を天領として収公した。これらの諸村はこの後、大坂谷町代官所の支配下に置かれて明治維新を迎える。一方、その他の村々は尼崎藩領として幕末を迎えるのである。村人の生活の中には莊園時代の風習も

残っており、森・中野・小路・北畑・田辺・深江・青木は、現在の芦屋市内の津知・三条とともに本庄九か村と称した。西青木・魚崎・横屋・住吉・田中・岡本野寄は山路庄、御影・郡家は郡家庄、石屋・東明は西隣りの今の灘区の徳井とともに徳井庄と称して、それぞれ行動を共にすることが多かつた。

そのような農村地帯を、今の国道二号線のあたりに松並木が続いていた。大名行列の通る西国街道である。道ばたに御影には一里塚が築かれ、住吉には茶店も出ていた。一方、海辺には、ほぼ現在の国道四十三号線と並行する浜街道とよばれる交通路がにぎわっていた。この地方は京・大坂に近く街道ぞいでもあるため、経済的發展も早く江戸時代の前期に在地にかなりの資本の蓄積がなされていた。ことに六甲山中の急流を利用した水車産業が栄え、初めは菜種油絞り、後には精米にも利用された。それとともに魚崎・御影を始めとして酒造業が成長し、天保期以降伊丹・池田に代つて灘酒の名は高まつていく。また水車臼としても利用された花崗岩の石材は、御影や住吉の山中から切り出されて各地に売り出され御影石の名で知られていった。

そのような酒や石の積出しで御影や魚崎の港は盛え、青木・深江は漁村として活気を帯びていった。

深^{ふか}江^え

本庄地区は東灘区の最も東の海岸一帯で、近世には深江・青木・西青木の三村があった。

その海辺、かつては水の深い船どまりの入江となっていた地形を、深江の地名はうかがわせる。しかし時とともに土砂が堆積されて砂浜が発達し、西隣の青木とともに江戸時代には漁村として繁栄した。村人は、六甲の山越えに有馬温泉まで海産物を売りに行ったが、その山越えの交通路は、今も魚屋道^{ととやまち}の名を残している。

漁村だった深江ではえびす神社もまつられており、深江南三丁目のえびす神社跡には、碑と深江の漁業史の書かれた史跡案内板が建っている。

深江の浜



大日靈女神社

深江本町三丁目五
阪神深江駅

江戸時代から、深江こゆれば大日如来、高い高橋、おどり松、と近在の名所を唄った俚謡があった。一般に大日ツアンと親しまれる深江の氏神が、この神社である。

むかし本庄町三丁目から深江北町四丁目のあたりに、薬王寺という真言宗の寺があつて、大日如来を本尊としていた。ところが、文明十三年（一四八一）、住職観空は蓮如に信服して、浄土真宗に改宗し、本尊を阿弥陀如来に改めた。そのため寺を出された旧本尊をひきとつて村人が祀つたのが、この神社の創建だと伝えている。

おそらく神仏習合の中で、大日如来を本尊とする薬王寺の鎮守社が、明治の神仏分離によって大日靈女を祭神とし、村社にされたのであろう。大正時代に市街地化と高等商船学校の設置によって、森稻荷のお旅所であつた踊り松の地が同校の敷地となつたため使えなくなり、この神社境内に移された。



漁村時代の深江の浜（志井保治氏提供）



大日靈女神社

製とすれば区内最古の在銘遺品である。なお無銘ではあるが、小林墓地内に一基、高さ約五十cmの小型の室町時代作と思える五輪塔がある。



小林墓地の石仏

文禄三年の石仏 住吉山手二丁目一

市立住吉中学校の西、小林墓地の北の入口に石垣に埋めこまれた古い六地藏がある。その左はしに「文禄三年二月吉日」と銘が刻まれている。東灘は御影石の産出地でありながら、生産地であったためかあまり古い石造美術品が残っていない。この石仏が文禄三年（一五九四）

岡本の梅林

岡本六・七丁目に、梅林、梅ヶ谷などという古い地名があった。ここが、むかしへ梅は岡本、桜は吉野、みかん紀の国、栗丹波、と唄われた岡本梅林のあとである。この梅林のはじまりがいつかはわからないが、羽柴秀吉が訪れたという伝えもある。

最盛期、江戸時代の梅見のにぎわいは、『撰津名所図会』にも描かれ、寛政十二年（一八〇〇）の『山水奇観』に記され、人々に知られるようになり多くの文人が訪れた。領主である尼崎藩主も、花の頃には騎馬武者を数十人伴って訪れたという。

山麓一带に咲きほこる梅花を、乗客に楽しませるため明治時代には、その南を走る鉄道も、一時停車をしたものであった。むかし兵庫の人々はへ梅は岡本、桜は生田、松のよいのが湊川と唄った。しかし岡本梅林は今も無く旧湊川堤（今の新開地本通）の松も生田神社馬場さき（今の三宮生田筋）の桜にもかつての風情をうかがうすべはない。

また、昭和五十七年（一九八二）に、かつての梅林



江戸時代の岡本梅林のにぎわい（『撰津名所図会』より）



岡本（梅林）公園

をしのばせる公園が岡本六丁目の高台に開設された。この「梅林公園（岡本公園）」には紅梅・白梅・技垂梅など約三十六品種 百九十本の梅が植えられ、池水

もあつて、花の季節には観梅客でにぎわっている。高台からの展望もすばらしい。平成二十三年（二〇一一）には、拡張およびバリアフリー化を目的とした再整備が行われ、現在に至っている。

素^す蓋^さ鳴^お神社
 天王山という美しい小山の上に鎮座する。由緒は不詳だが、古くから岡本の産土神^{うぶすなかみ}の社が起源。この地域で信仰され、村内の背山にあつた山の神の小祠を明治の後期に合祀して、今の形となつたと思われる。

素蓋鳴神社 本山町岡本市バス岡本七丁目



素蓋鳴神社



安政五年正月に建立された山の神の祠

山の神の祠

東灘では、春に山からおりて田の神になり秋には稲をみのらせたあと山に帰る、という山の神がひろく信仰されていた。

金鳥山から風吹岩に通じる山道が、森からの登山道と合流する南方に、字山ノ神という地名があり、雑木のしげる小峰の上に、石の祠が立っていた。これは深山の神で、安政五年（一八五八）正月の字が刻まれ

た祠とともに大日霊神社に移設され、新たに神殿が建てられた。

現在でも毎年十一月二十三日にお祀りをしている。

また、白鶴美術館から渦森台への途中にも住吉村の山の神が祭られていた。

大日女尊神社

西岡本四丁目八
市バス西岡本四丁目

住吉川の東、阪急電車の北にあり、もと野寄村の氏神、祭神は大日女尊。縁起は不祥だが、むかし住吉川が大洪水を起したため、この神社は深江まで流れていった。そこで深江にお祭りしたところ、夜な夜な神さまが、「野寄に帰ろう帰ろう」といわれたので、ここに祭りなおした、と野寄の人々は伝える。祭神が深江大日霊女神社と同一であるところから出た言い伝えであろう。

広い境内の東方にある大日如来を祭るお堂は、神仏習合のなごりである。



大日女尊神社

西光寺

本山北町五丁目十
市バス本山第一小学校前

阿弥陀如来を本尊とし、浄土宗知恩院末で山号を東桜山という。境内南すみに、五輪塔や石仏が集められているが、その中にもと青木から移されたかくれキリシタンの遺物と思われるものがある。竿の部分が十字架状になり、その下部にマリア観音が浮きぼりになっている。キリシタン灯籠の一部である。また堂には木造の優美な観音菩薩座像がまつられて



キリシタン灯籠

阿弥陀寺

住吉本町二丁目
J R住吉駅

浄土宗知恩院派。寛永十四年（一六三七）、天譽牛公大和尚の開基。本堂が失火による焼失ののち、安永九年（一七八〇）に勇譽猛道正哲和尚によって再興された。境内には徳本上人の番号碑があり、観音堂には、かつて観音林の地にあつて水害にあい流失したという慈明寺の本尊と伝える六臂観世音菩薩が安置されている。



阿弥陀寺

なお、寛政年間に呉田の吉田家が徳本上人のために建てた赤塚山の草庵は、はじめこの寺の支院だったという。

昭和二十年（一九四五）八月の空襲でも焼け残った、山門、観音堂も阪神・淡路大震災で倒壊したが、平成九年（一九九七）に再建された。

また、ここには戦後、外国人仏教徒が多数宿泊し、国際交流の実を結んでいる。



六臂観世音菩薩（阿弥陀寺提供） ※一般非公開

永思堂跡

魚崎南町七丁目八
阪神魚崎駅

山本復齋は延室八年（一六八〇）魚崎の酒造家に生まれ、名を信義とつけた。元禄十年（一六九七）兄の良貴と京に上り、山崎闇齋の高弟浅見綱齋に師事して朱子学を修め、のち高田末白から垂加神道を学んだ。宝永元年（一七〇四）魚崎に帰ってからは、姫路藩主などの招きにも応じずこの地で雀の松原にちなんで「雀松精舎」を開いて多くの子弟を教え、享保十五年（一七三〇）京都で亡くなった。

覚浄寺の西北すみにあつた永思堂は、元禄十一年（一六九八）に、復齋が邸内にまつた垂加霊社のあとという。その社は後に、山崎闇齋・浅見綱齋・高田蒙齋がまつられ三賢祠堂とよばれ、その他に山本復齋・本居宣長・平田篤胤も合祠されていたが、震災で倒壊した。永思堂の名は、詩経の「永言孝思、孝思維則」からとられたという。

なお、復齋は、神路山講義、天道一道講義、四書国読など多くの著述がある。

御影石と石切り場

六甲南麓に産する花崗岩は早くから良質の石材として利用され船積みされた地名をとって、花崗岩一般を御影石と呼ぶほど、世に知られている。

主産地の御影・住吉で、いつ切り出しが創められたかはわからない。が、豊臣秀吉の大坂築城に際しては付近の山中から石が搬出され、それに続く京の三条・五条の大橋かけ替えに利用された石材も、この地で切り出されたとされる。「津国御影、天正十七年」と刻んだ橋脚石材が、今も京都国立博物館や平安神宮神苑に保存されている。

全盛期の享保・宝暦期には、荒神山・重箱山・五助山などに採石場が開かれ、麓の石屋村（今の御影石町）は石工の村としてさかえ御影の浜から船積みされた石は各地に売り出された。寛政十一年（一七九九）の『日本山海名産図会』は、このあたりの石の特質や切り出し法などをよく伝えている。

「摂州武庫・兔原の二郡の山谷より出せり。山下の海浜御影村に石工ありて、是を器物にも製して積出す

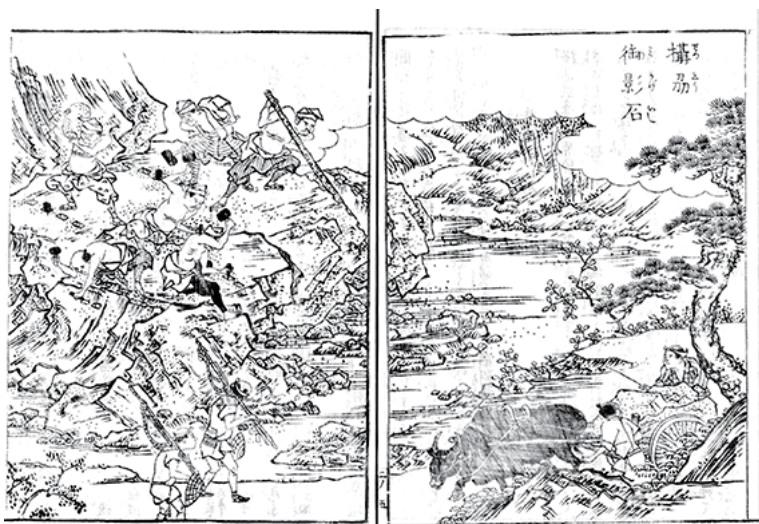
故に御影石とはいえり。……今は海渚次第に浸埋て山に遠ざかり、石も山口の物は取盡ぬれば、今は奥深く採りて廿丁も上の住よし村より牛車を以て継で御影村へ出せり。……切取るには矢穴やあなを掘て矢を入れ、なげ石をもってひびきの入たるを手銚てこを以て離取はなとりを打附割うちつけわりという。又横一文字に割をそくい割とはいふなり。」

明和七年（一七七〇）大坂の石問屋株仲間の出現、さらに大正以来のセメントの進出などで御影石の切り出しは衰えていった。

荒神山中の石切り場や、山中の石切り道・石屋川などは、往時の産石をうかがわせる地名である。付近に古い石造美術品はあまり遺されておらず、住吉町小林墓地の文祿三年（一五九四）の地藏尊が、今のところ東灘区内では最古の在銘遺品である。



石切り場跡（荒神山）



『日本山海名産図会』（寛政11年-1799）に描かれた御影石の石切りと運搬

柿の木地蔵

住吉山手三丁目八
市バス白鶴美術館前

白鶴美術館の南下、山田公園の東に一体のお地藏さまがまつられている。側に柿の木が繁っているため柿の木地蔵の名で親しまれている。約八十cmの高さのその像は新しいが、台座は古びていて上段に「日本廻国本願主小田原定吉」「村安全往来安全 嘉十郎」、下段には「武州勇山 相州小田原同鶴尼」「嘉永六年丑正月廿二日」とある。切り出した石や、水車場からの米を積んだ車がゆき来した有馬道わきに交通安全を祈って建てられたものである。

ところが大正十年頃（一九二二）に牛車の御者が、この地藏さまに牛を結びつけ休んでいた。突然その牛が暴れだして、地藏尊はたおれ、首のところで折れてしまった。今のこの像は、そのできごとののちに地元の人々が再建した地藏像なのである。



柿の木地蔵

首地蔵

田中町五丁目四
阪神バス甲南町五丁目

もとの地には花松地蔵という石仏が祭られていて、首から上の病氣平癒に靈験があると信仰されていた。大正中期にその信者たちが新たな首から上の地藏像を造ったのが、この首地蔵である。

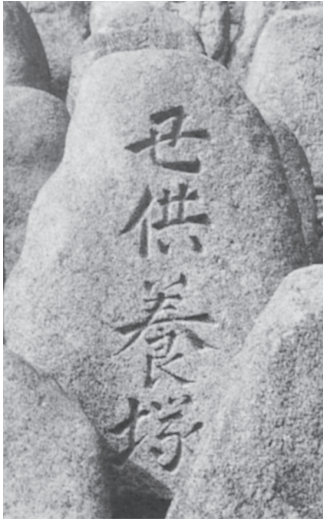


首地蔵

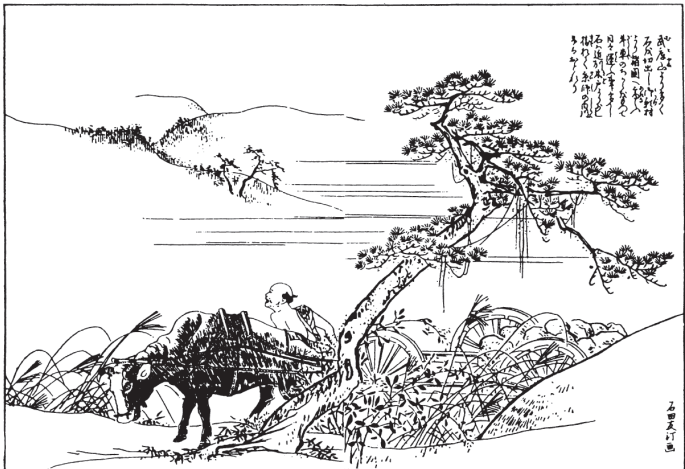
丑^{うし}供養の碑 住吉台四十八

水車場に米穀を運びあげ、住吉駅まで精米や粉を運びおろすには、ごろた車やねこ車などが使われ、牛がそれを曳いていた。その通った川ぞいの道が、いわゆるごろた道である。

しかし車を曳く牛は、時には足ふみはずして深い谷底へところげ落ちることがあった。住吉霊園にあるこの碑は、そのような不幸な牛たちの冥福を祈って、村人が建てたものである。



丑供養塚



御影石の搬出（『摂津名所図会』より）

水車小屋

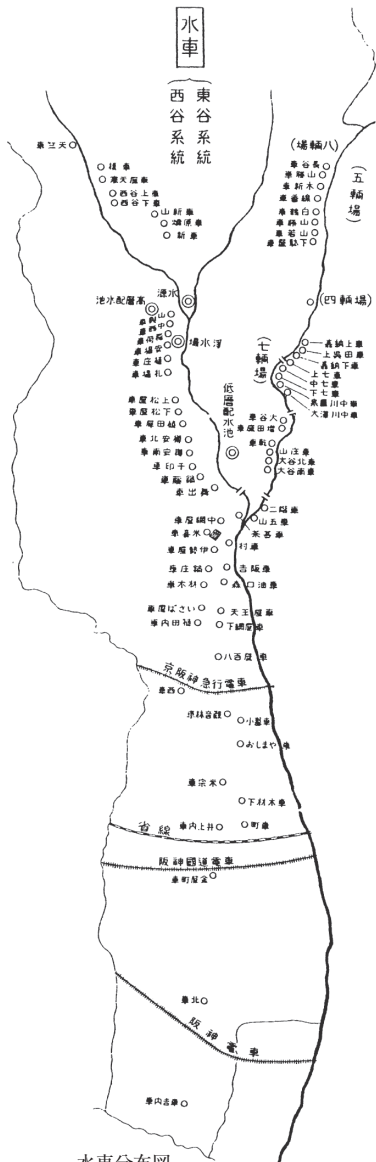
六甲山地を南流する中小河川は、急流であるため大きな水力を生み出し、古くから、流域に水車業を育てていた。山中に産出する良質の花崗岩が、石臼製造に好都合だったことも幸いした。芦屋川の水車谷や六甲川の水車新田の地名とともに、住吉川流域の四輪場・五輪場・八輪場などは、そのなごりの地名である。

住吉川には、すでに十七世紀はじめに小規模な水車が架けられているが、明和七年（一七七〇）油絞株によって製油が幕府から認められると、菜種や綿種を原

料として水車は、油絞りに大きな力を發揮しはじめた。従来の都市部での人力絞りを圧倒して灘地方は有力な産油地となる「名産灯油、葦屋あしや、野寄のより、住吉すみよし、五毛ごもう、熊内くまうちの五村、山水を樋みづくまにして水碓みづくまを以てそれを製す」と『撰津名所図会』にある。

一方、精米にも水車は利用された。天明以後、水車による精度の高い酒米を用いて灘酒の質が向上されるようになると、とくに酒米精製に、水車は不可欠となった。

やがて明治になって石油・洋灯が普及し、菜種産地で絞油業が発展すると、灘地方の油絞りは衰退するが、



水車分布図
（『住吉村誌』より）

水車は精米や製粉に利用され、このあたりには素麺業もさかえた。明治末から大正中期までの全盛期には、住吉川域に八十余棟の水車場が軒を並べ、約一万の白がすえられていた。

しかしその後、電力の利用で水車場は衰え、昭和五十年（一九七五）頃にはわずかに二輛「焼ヶ原の上車と下車」が働いていた。鋼鉄製の直径六mのこの水車は、香料製粉と、線香再製のためにコトコトまわっていたが、昭和五十四年（一九七九）に一棟は火災で焼失してしまった。

JR住吉駅の東、六甲ライナー高架下の「水車の広場」に住吉川の水車のおもかげがうかがえる。

平成十四年（二〇〇二）に山田区民会館西側水路（住吉山手四）に設置された二基の復原水車（山田太郎車・次郎車）は、平成二十六年（二〇一四）に、老朽化に伴い改修された。

住吉町内の水路

東谷、西谷の両水量を集めた住吉川は、この地方をうるおす第一の水源であった。農業用水に、水車のエ

ネルギー源に、それは人々の生活を支えていた。

本流の水は、落合で住吉と野寄・岡本とに分配され、宇井出口の引水口からは住吉・御影へと流されていた。

今も住吉町内には、川の水を流す水路や分水榭ますが道ばたにいくつも残っている。



山田太郎車・二郎車（住吉山手）

赤塚山の霊場

住吉山手八丁目三
市バス赤塚橋

六甲山は早くから、修験道場のひとつとして行場になっていった。行者たちは、鷲林寺から石の宝殿へ登り、西六甲の蜘蛛岩、三国岩などで行をし、そこから唐櫃村（北区）の山状の総家である四鬼家を訪ねた。

四鬼家は役行者の前鬼の子孫と信じられていたのである。

赤塚山にあった行者堂も、修験の行場のなごりである。堂内には役の行者の石像、不動明王がまつられており、毎年五月八日の戸開の日にはこの中で大護摩の行がおこなわれていて、山上講や百人講などの行者たちが参っていた。

行者堂のうら手にあった妙見碑と真阿上人の名号碑は、今、住吉山手八丁目の住吉浄水場の北側にある。真阿上人は安永九年（一七八〇）、大坂に生まれ諸国を行脚して人々を導いた。ことにその六字名号は、真阿流とよばれて人々に信仰された。さらに古くは、妙見碑はかつては、旧御影師範寄宿舎の地にあり、真阿上人の碑は住吉川西岸の西国街道ぞいにあった。

また、赤塚橋上流には弓弦羽の滝があり、修行場として利用されていた。一帯が信仰の地だったのである。

妙見碑と真阿上人の名号碑



弓^{ゆづる}弦羽の滝

かつて住吉川西谷には、十二の滝があった。その最大のものが、龍天山大滝とか稲妻の滝ともよばれた弓弦羽の滝だ。昔徳本上人によって開かれた行場と伝え、多くの里人がこの滝に打たれて修行した。

この霊場も、上流に団地ができ、かつてのおもかげは失われてしまった。

徳本寺

住吉山手六丁目一
市バス白鶴美術館前

白鶴美術館の西隣に、大正五年（一九一六）徳本上人の百回忌を記念して建立された上人山徳本寺があ



徳本上人の名号石塔

る。徳本上人は、地獄のおそろしさをわかりやすい歌をつくって教え、念仏で極楽に往生できることを人々に説いて、農民を教化していた。

寛政十年（一七九八）、住吉の吉田道可に招かれた徳本上人は、赤塚山に庵を結んで三年間とどまり、弓弦羽の滝で修行しながら村人の教化に努め、毎月十五日に信者に一万遍念仏の名号を授けた。

以後、赤塚山を上人山とよぶようになった。寺には上人の座像がまつられ、遺品・遺墨が多く保存されている。境内には文政九年（一八二六）に徳本上人独特の蔦名号の字体を刻んで、吉田道円が建てた高さ百八十二cmの大きな六角の名号石塔があり、塔の前には知恩宮尊超法親王寄進の菊花紋の入った石灯籠がある。

寺の北方、上人山上の庵室は、昭和十三年（一九三八）の洪水で流失してしまったが、今も住吉山手五丁目には上人の座禅石と座像がまつられている。

境内にある火伏地藏は、もと住吉山手の赤塚山公園に祀られていた。古く京都の愛宕神社から勧請されたと伝えられ、火災よけの仏として住吉村の人々に信仰されていた。

「革命紀行」(太田蜀山人)

一 西国街道の往来 一 文化元年(一八〇四)

蘆屋川をかちわたりしてゆけば、左に海ちかくみゆ、右に稲荷之社自是三町と多りし碑あり、又自是東尼崎領自是西尼崎領他と多れる碑あり、又ゆきくして自是西尼崎領、自是東他領入組と多れる碑もあり、片町といへる村をへて、小流を渡りて右に寺あり、木村周藏とかける制札あるは、御代官所なるべし、住吉川や、大なる川原なり、板橋あれどかちわたりす、人家あり、茶屋ありて賑にぎわへり、こゝに兎原住吉の四社あり、訛なまりて茨住吉といふ、駕かこより下りて入る、右に社あり、左に池めいたる所に長き石あり、さゝれ石といふ、拜殿のわきより入て同社の前にぬかづく、神さびたるけしきいはんかたなし、社をうちみつ、ゆく、右にまやさん道といふ碑たてり、これ仏母摩耶山とあり切利天上寺なり、又右に一王山千史小善寺道、川上八丁といへる石表あり、石屋川をかちわたりて田面をゆく……

中野の八幡神社の弓

本山北町四丁目十四

神社創建は不詳だが、一月十五日午前中に昔から弓の神事が続けられている。

輪番のトウヤの家から、弓・矢・的まと、そしてキヨツネとよぶ特別の神饌を持った人々が神社まで行列し、参拝する。そのあと境内の木に的まとをかけ、弓をひく。この行事は「まと」とよばれている。的の裏に「患」という字が書かれており、かつてはその年の豊凶を占い、悪鬼をふうじめる行事だったのであろう。

一月十九日の厄神祭では、湯立てて神楽も続けられている。なお、拜殿わきにころがっている直径五十cmほどの石は、昔、若者たちが力くらべをした力石ちからいしだ。



中野八幡神社



天保7年(1836)の東灘(「摂津国名所旧跡細見大絵図」から)

西 国 橋 御影石町三丁目七

平安時代に大路とされた山陽道は、都と九州太宰府を結ぶ古代国家の大幹線道路であった。三十里（後の約五里）ごとに設けられていた駅として『延喜式』には葦屋・須磨・明石・賀古の駅名が記載されている。鎌倉時代には、東海道の繁栄にひきかえ山陽道は衰えたが、江戸時代になると西国と畿内をむすぶ交通路として大いににぎわい西国街道の名で親しまれていた。

京から内陸部を進んできたこの西国街道は、西宮あたりで海岸にで、打出で二本に分岐した。つまり、海辺に沿う浜街道と、平地の中央を進む本街道だ。御影小学校の北側の道が、この本街道筋である。御影中学校の西門わきにある老松は、大名行列の通った頃のこの街道のおもかげをわずかに残す並木の一本だといふ。阪神石屋川駅北方の西国橋も、この街道筋に当たっているためにつけられた橋名である。

幕末に、開港場となった神戸の居留地の外人と大名行列との衝突をさけるために、石屋川から明石の大蔵谷に至るまで、西国街道の迂回路が建設された。これ

がいわゆる徳川道である。この西国橋の東詰、石屋川の少し上手に、西国街道との分岐点がある。

西 国 橋



一里塚

御影中町七丁目、御影小学校の東の一面はもと字一里塚といった西国街道ぞいの一里塚があったところだ。街道に一里ごとに塚を築いて旅路の距離を計れるように命じたのは、織田信長だと伝える。街道筋の松並木からめだつように塚の上には榎が植えられたという。実際には、豊臣秀吉が備中河辺と肥前名護屋の間の山陽道ぞいに一里ごとに築いたのが初めだとされる。しかし江戸日本橋を起点として全国的にこれを整備しはじめたのは、慶長九年（一六〇四）の徳川秀忠であった。このあたりでは、江戸時代の絵図によると津知（芹屋市）・御影・脇浜・兵庫湊口・西代・境川・東垂水（以上神戸）・大蔵谷（明石）の順に、西国街道にそって一里塚が築かれていた。

明治以降の里程標の設置で、これらは姿を消していき、すでにそれらの正確な場所もわからなくなってしまうが、御影では前述の字名から塚の位置がわかった。町名改定で、御影でも一里塚の地名が消えたが、わずかに小学校北東の天神川にかかる橋には一里塚橋

の名が残っている。



一里塚橋

魚屋道

東六甲の登山コースの一つの魚屋道は、江戸初期までさかのぼれる最古の山越え交通路のひとつだ。寛延元年（一七四八）の『撰津国名所大絵図』など多くの古地図によると、西国街道を森南町で分岐して山に登り、六甲山頂を越えて湯山（有馬温泉）に通じる道があった。『撰陽群談』は「（六甲）山頭より有馬湯山に越道あつて六甲越と号す。樵夫如きの者、乃津甲越と云へり、兎原郡森村へ出る所也」という。

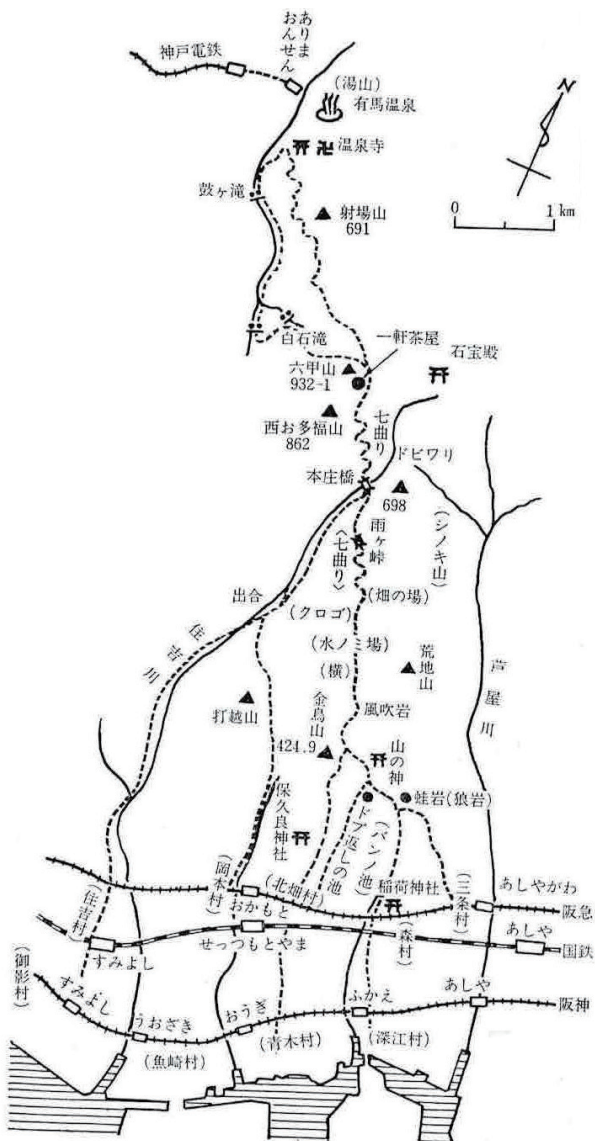
従来、灘地方から有馬への街道は、芦屋・西宮を通過して北上、小浜（宝塚市）・生瀬（西宮市）・船坂の宿場を通過していた。それは、灘と有馬の人々にとっては大きな迂回道だ。しかし、山越えのその直通路の交通は宿場の商人や輸送業者にとっては、大きな減収となる。このため寛文十二年（一六七二）以来のこの山道の歴史は、利用しようとする村人と、道を閉させようとする商人との闘いであった。文化三年（一八〇六）の争論についても、多くの古文書が伝わっている。新たに工事して「往還同様ニいたし道筋ヲ日々牛馬諸荷物旅

人駕籠等技通り候ニ付、私共駅所差支ニ相成」と、小浜・伊丹・尼崎・生瀬の商人が大坂奉行所に訴え出た。被告は、有馬湯山の町人と灘本庄九か村民だ。約半年の後、「新規道ハ切埋」め通行は禁止された。

その後もこの山道は、「六甲越え」「湯山間道」などと呼ばれて抜け荷や往来があとをたたなかつた。

明治維新の後、自由な交通が始まるが、明治二十年（一八八七）頃を最後に、この道は旅人に利用されなくなる。住吉に鉄道の駅ができ、旅人が駅から住吉谷の道を通り始めたからだ。それでも深江や青木の海産物を温泉場に運ぶには、この道が最短コース。この頃から専ら「魚屋道」の名でよばれるようになったのである。登山道となった道筋が、住吉川上流と交叉する山中に、大きな石造の本庄橋があったが崩壊し、その一部が流出したため、その代りに川沿いに広場をつくり橋の由来を託した標識を設置し、橋石の一部を置いて昔の姿をとどめている。

昭和五十七年（一九八二）、阪神深江駅の北、銀行の前に建てられた魚屋道の碑は、平成十四年（二〇〇二）に大日靈女神社境内南西角に移された。



魚屋道地図 (『歴史と神戸 108』1981年より)



本庄橋跡の碑



在りし日の本庄橋

浜街道の碑 御影本町二丁目

江戸時代、打出で分岐した西国街道の本街道は今の国道二号線ちかくを走っていて、大名行列などが通った。一方、浜街道は浜辺（ほぼ国道四十三号線にそって）を通り、幕末頃には庶民の交通路としてにぎわっていた。国道四十三号線に面した御影本町二丁目の東南かどには、当時の道標が立っている。

●直ぐ兵庫 三里

●是ヨリ徳本上人石碑 十八丁

七里

●直ぐ大坂道 西宮

三里



浜街道の碑

●嘉永二 己酉年 和泉屋 新吉
と刻んである。西国街道から、赤塚山にある徳本上人の名号碑へのわかれ道に立てられたものである。

二つの道標石

魚崎南町三丁目十九
五百池公園内

魚崎八幡神社の北の児童公園の中に、二つの石碑が立っている。一つは、高さ約1mの自然石に「左兵庫道 右大坂道」と刻まれている。これは旧西国街道の浜街道にあった道しるべだ。もう一つの石碑は、「魚崎道路元標」で、明治以降に里程を正確に測って各地に建てられた標石のひとつである。



二つの道標石

浜街道の街並 御影本町六丁目～八丁目

江戸時代の浜街道の街並が、一か所震災前までは残っていた。御影本町六丁目の東南すみの交番のうらから、八丁目西町会館の所まで、国道四十三号線のすぐ北に国道と並行した道がつづいている。昔ながらのたたずまいの中には、江戸中期に建てられた家もあったという。この道を私設の飛脚が通っていたことを覚えていた老人もいたが、阪神・淡路大震災で街道沿いの多くの家が全壊した。

ところで、明治後期の実測地図では、この浜街道筋に「西国街道」の名が記されている。近代になって海岸部が発展し、内陸部を通っていた近世の西国街道と、いわばそのバイパスだった浜街道の主客が転倒している。明治四十二年（一九〇九）に行われた日本最初のマラソン大会では、出発点の湊川埋立地（のちの新開地）からゴールの新淀川西成大橋の間、東灘の地域ではこの旧浜街道がコースになっていた。



昭和初期の浜街道「神戸市文書館提供（神戸大学文学部所蔵）」

灘の 一ツ火

本山町北畑字ザクガ原
保久良神社鳥居前

夜、摂津本山駅あたりから北の山を見ると、山腹にひとつの灯火ともしびが見える。山上の保久良神社の鳥居前にある石灯籠の灯であり、古来「灘の一ツ火」とよばれて夜の船人の目じるしとされてきた。

伝説によると、熊襲遠征くまそから帰る日本武尊やまとけるが、夜の大阪湾で航路を見失なった時、一心に神に祈ったところ、北方にひとつの灯がみえた。それをめざして船をこぎ、無事に難波なにわに帰りついた。それがこの灯のおこりだという。俚謡わらべうたにも「沖の船人たよりに思う。灘の一ツ火ありがたやと唄われている。」

江戸時代には北畑村の天王講てんのこうの人たちが、交代で毎夜ひと晩分の油を注いで点火をつづけたというが、今は電灯に変わっている。現在の石灯籠は、文政八年（二八二五）建立のもの。



灘の一ツ火

八幡谷

天上川をさかのほり、岡本八幡神社の北方から山間に入ると八幡谷である。谷あいの巨巖と森林は、「あたかも黒竜の雲間に玉を争うが如し（『武庫郡誌』）」というおごそかな雰囲気をもっていた。そこで昔から行場になっており、今も谷の奥には歓喜天を祭る行場がある。

灘の地名

古代からの摂津という国名や、菟原（海原から出たといわれる）という郡名は、このあたりが海辺という印象を人々に与えていたことを物語っている。奈良や京都から内陸部を通ってきた旅人が、初めて出会う海岸地帯がこのあたりであった。古来の名所・芦屋灘の岸辺というのが略されて、灘辺となり、江戸時代の古文書などには、灘目（ナダベが訛ってナダメとなったのだらう）とか灘ノ川（灘ノ側の意味か）と記されている。

中世にはこの灘地方に、多くの荘園があった。灘五郷という名称は、もともと中世のこのあたりにあった五つの荘園——芦屋荘・山路荘・得井荘・都賀荘・葺屋荘——の総称であった。

江戸時代には灘地方は、灘区の敏馬あたりを境に東は上灘、西は下灘とわかれていた。上灘はさらに東組（打出からは住吉川まで）、中組（住吉から東明まで）、西組（新在家から敏馬まで）の三組にわかれ、この三組に下灘組をあわせて、天明の頃には灘四組などよばれていた。

灘酒の歴史

灘の地名は生一本の産地として知られるが、灘酒の歴史はそう古いものではない。

古代に宗教的に用いられた酒は中世になると嗜好品として愛飲され、消費の多い都市で醸造業が成長する。江戸幕府は米の浪費を抑えて、年貢としてできるだけ多くの米を徴収するため、当初、酒造りを抑えていた。しかし、新田開発や農業技術の向上で米の収穫量

が増えて米価が下ると、米の消費を勧めて米価を引上げ、同時に酒造家からの営業税をも期待するようになった。平和な世の中で商業・交通が発展する中で、幕府は寛永十九年（一六四二）に街道沿いの都市での酒造りを認め、やがて収穫直後の米価引上げのために冬季の酒造りを奨励した。こうして十七世紀後半には、尼崎・西宮・兵庫などの町で醸造業が発展する。ことに良質の米と地下水、新しい製法と丹波杜氏の技術に支えられて「丹醸」と称された伊丹や、池田が酒どころとして著名であった。十八世紀の初めに江戸が百万の人口を擁する大消費地となると様々な物資が江戸に送られた。こうなると海運の便が重要となり、十八世紀の前半には灘地方から少しずつ江戸に送られる酒の記録が出現しはじめる。ことに伊丹の技術を導入した西宮の酒造りが急成長している。

宝暦四年（一七五四）酒の勝手作りが認められると、灘の酒造りは本格化する。大阪の近くで早くから貨幣経済が浸透していたこと、宮水に象徴される地下水と良質の米、丹波杜氏の技術に加えて海運の便、さらに海辺の埋め立て地が酒蔵用地となったことなどが灘の

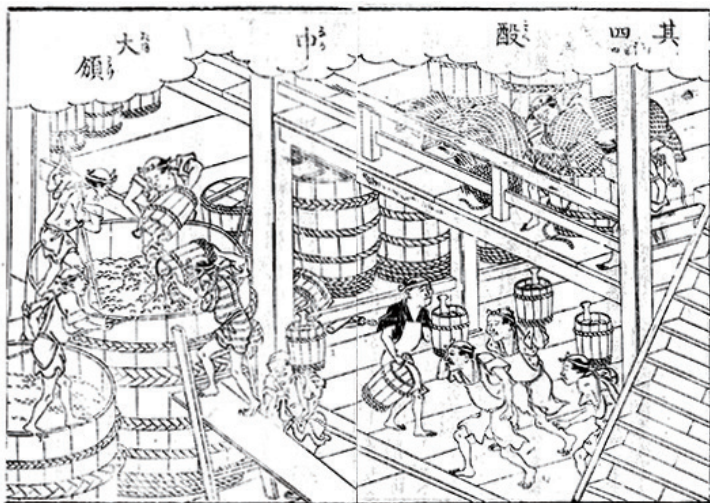
生一本の背景であった。

記録によると、天明五年（一七八五）には江戸に荷上げされた酒の中で、灘酒は四割を超え、文化十四年（一八一七）には五割を超え、幕末には六割を占めている。

こうして明治の初めには灘酒の名声は確固たるものとなっていた。明治十九年（一八八六）に摂津灘酒造組合が結成された時には、東方の西宮や今津の醸造家もこれに加わった。この時、江戸時代の下灘組と上灘西組を西郷・上灘中組を中郷、上灘東組を東郷と称し、西宮郷と今津郷を加えて、新たに灘五郷と称し始めたのである。

現在、灘五郷酒造組合は、国道四十三号線南側、御影本町五丁目に建っている。

平成七年（一九九五）一月十七日の阪神・淡路大震災で酒造地帯は未曾有の被害を受けた。木造や煉瓦造りの資料館、記念館などが倒壊し、生産ラインも大きな打撃を受けた。しかし、酒造メーカー各社の懸命な努力により立ち直りは予想以上に早く、復興から新たな一歩を踏み出している。



昔の酒づくり（『日本山海名産図会』より）

菊正宗酒造記念館

魚崎西町一丁目九
阪神魚崎駅

魚崎西町一丁目の住吉川西岸に、白壁に焼羽目坂が美しい菊正宗酒造記念館がある。御影の本嘉納家が万治二年（一六五九）に創業して以来、昭和三十三年（一九五八）まで使用していた酒蔵で、内蔵・本店蔵ともよばれていた。約三百年の間に、二十万石の酒をかもしたという。

主屋は木造二階建てで京呂組きやろの構造・明暦瓦がふかれ、江戸時代初期の建物であった。館内には約百二十点の、古来の酒造用具や酒器が収蔵されており、昭和四十六年（一九七一）に酒造用具三百三点が国の重要文化財（有形民俗文化財）に指定され、平成十二年（二〇〇〇）に二百六十三点が追加された。構内には、かつて住吉川流域にあった水車小屋の模型も建てられている。最初は御影本町一丁目にあり、国道四十三号線の建設に際して、魚崎西町に移されたが、阪神・淡路大震災で全壊し、平成十一年（一九九九）に現在の菊正宗酒造記念館が建てられた。現在、記念館では、酒造りの工程を再現した展示や利き酒をおこなっている。（161ページ一覽表参照）



菊正宗酒造記念館

櫻正宗記念館 魚崎南町四丁目三

櫻正宗は正宗の元祖とされ、宮水を発見したといわれるのが六代目の山邑太左衛門である。その「櫻正宗」直営の和風レストランのほか、ショップ・ギャラリーなどがある。
 (161ページ参照)



櫻正宗記念館

白鶴酒造資料館

住吉南町四丁目五
阪神住吉駅



白鶴酒造資料館

白鶴酒造資料館は、大正初期に建造され昭和四十四年（一九六九）まで本店一号蔵として稼動していた酒蔵を、そのまま保存して、資料館として昭和五十七年（一九八二）から公開していた。震災で全壊の被害を受けたが、修復・再建され平成九年（一九九七）四月から再公開されている。

蔵と大蔵の二棟からなり、前蔵は従前の木組みの骨格を復元、大蔵は鉄筋コンクリートで再築されたが二階部分は壊れた蔵の材料を使って、木造蔵の趣を残している。

館内には被害を逃れた仕込み用大桶をはじめ、酒造りの道具など約五百点が展示され、酒造り工程が一目で分かるようになっていている。（161ページ一覧表参照）



白鶴酒造資料館の内部

甲南漬資料館

御影塚町四丁目四
阪神新在家駅

高嶋酒類食品(株)の初代社長宅で、震災では半壊の被害を受け、復旧にあたって本店に併設されていた資料室を移し規模を拡大、平成九年(一九九七)四月に公開された。大正・昭和初期の道具や資料のほか、魚崎郷、御影郷の震災前の街並みの模型がある。

(161ページ一覽
表参照)



甲南漬資料館の内部



甲南漬資料館

神戸酒心館

御影塚町一丁目八
阪神石屋川駅

昭和六十年（一九八五）、福寿酒造の精米所を改装して開設された福寿酒造の「酒心館」では、江戸時代からの酒造り道具などの展示を行っていたが、震災で被災した。平成九年（一九九七）十二月、福寿酒造と豊澤酒造とで「神戸酒心館」を設立。酒蔵としては日本で初めて耐震構造を採用した「福寿蔵」、酒器などクラフトコーナーのある「東明蔵」、酒蔵を模した飲食店「水明蔵」、震災で被災した木造の酒蔵を修復した多目的ホール（椅子百五十席）の「豊明蔵」からなる複合施設である。（161ページ一覧表参照）



神戸酒心館の内部



神戸酒心館

浜福鶴吟醸工房

震災で全壊した木造蔵の跡地に建設した工場の一部を開放し、仕込みからしほりまでの現代的な工程が見学出来るようになった。試飲、物品販売のコーナーもあり、定期的に落語などのイベントも行っている。(161ページ一覧表参照)

魚崎南町四丁目四
阪神魚崎駅

浜福鶴吟醸工房



「摂津国名所大絵図」(寛延元年)(1748年)



魚崎の街なみ

昭和五十七年（一九八二）には、魚崎郷内の酒蔵をたずねて歩く「酒造の道」が整備された。石畳状の道路や街路樹の松が、酒蔵の黒塀に映えて落ち着いた景観を醸し出していたが、阪神大震災で多くの酒蔵が倒壊した。

震災により伝統的な町なみが失われつつある中、平成十年（一九九八）に自治会と消防団及び酒造業者による「魚崎郷まちなみ委員会」を設立、「魚崎郷地区景観形成市民協定」を締結し『魚崎郷地区街なみ環境整備事業』で伝統的なまちなみ再生に取り組んだ。

これにより歩道や高欄、ガードレールの美装化や区域への主要アプローチ部分に案内板・モニュメントを設置することで、酒蔵地域らしいまちなみが形成できた。

一方、建物外観や塀などについても、酒蔵地域にふさわしい意匠とするなど修景施設整備を実施し、現在も魚崎郷まちなみ委員会により、まちなみ形成への取り組みが行われている。



魚崎の「酒造の道」

鷺の森と鷺の宮

山北町六丁目二
阪急岡本駅

山本第一小学校の北方、阪急電車の山手に旧北畑村の氏神八幡神社がある。ここはもとうっそうと繁った森があつて、鷺の森とよばれていた。明治初めの記録によると、幹まわり五mもの杉をはじめ八十七本の樹木があつた。そして森の中の社を、鷺宮八幡神社と称していた。明治の初めから昭和初期までに、森は切り開かれ、広場には背後の山上の保久良神社のお旅所ができた。

広場中央の松は、祭りの日にだんじりや神輿がその周囲をまわる一ツ松である。

鷺の森の櫟モニュメント

山北町六丁目二
鷺宮八幡神社境内

鷺の森のなごりとして、一本の櫟の大木があつた。樹齢八百年と計算されるこの木は、高さ十六m、周囲五m、神戸市から保護樹木に指定された。昔は、この木にからすがとまって、長く鳴くと村中に不幸がある、と言われていた。

広場は子供たちの格好の遊び場となり、夏には、たくましい櫟の木陰は、すずしい憩いの場となつたが、今では切株が残るのみである。

鷺の森の櫟モニュメント



青^あ木^き

青木は、かつては静かな砂浜ぞいの漁村だった。江戸時代には、ほぼ国道四十三号線のあたりが波打ちぎわで、伝説では、遠い昔に青い海亀に乗って、保久良神社の神さまが、この浜辺に漂着されたという。そこからこのあたりに、青亀^{あおかめ}という地名がつき、後に青木に変化したのだという。

近世以来、漁業のほか、水車を利用して天保年間に木村重佐衛門の手で大和の三輪からもたらされて始められた素麺製造業、享保年間に山形忠佐衛門によって開始された酒造業も明治頃までさかんであった。

昭和 25 年頃の青木浜（青木文化センター提供）



八坂神社

青木五丁目一
阪神青木駅

天保十一年（一八四〇）創建、素盞鳴命を祭神とする。旧青木村の氏神で、今では国道の騒音に直面しているが、江戸時代まで海に面しており、この地が上古、保久良の神さまが青亀の背に乗って上陸された所だと伝える。七月二十五日には夏越し祭があり、茅の輪をくぐって無事を祈る。

昔は境内に酒造の神・松尾大明神もあつて、土地の酒造家が旧暦三月三日に祭っていたが、明治二十年代の青木の酒造業衰退とともにその社は姿を消してしまった。

境内の西南すみに旧本庄村道路元標が建っている。

八坂神社



本庄村道路元標

土樋割と水争い

芦屋川支流の蛇谷と住吉川の分水の峠を、ドビワリという。水争いのなごりの地名だ。

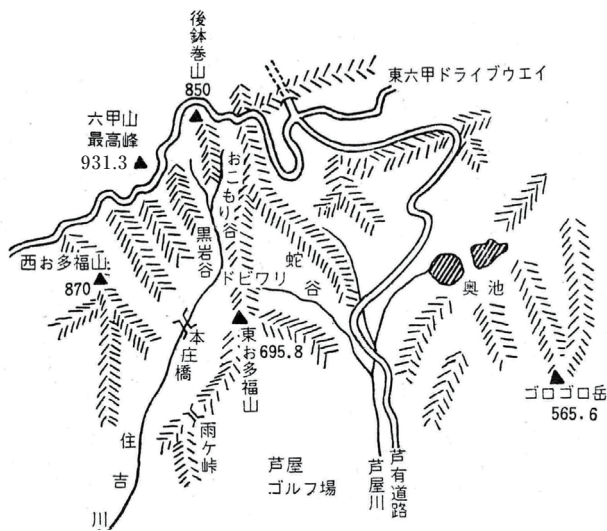
文政十年（一八二七）六月ひどい旱魃があつた。芦屋川では水がかれた。流域の芦屋・打出の村人は川をさかのぼって水源を調べたところ、東お多福山の裏で、彼らは西側の谷に住吉川がまだかなりの水量を有しているのを見つけた。そこで住吉川の上流からこの峠に土樋を通して、蛇谷に水を流し取る工事をした。

その後、減水した住吉川の下流の村人が、川をさかのぼって東お多福山の北の峠でこの土樋をみつけた。住吉・横屋・魚崎・田中・野寄・岡本の六か村の村人は激怒して、峠まで登り、土樋を粉々に打ち壊した。打出・芦屋は、六か村の破壊行為を大坂奉行所に訴えた。これに対して六か村は、打出・芦屋の引水の方が不法であると主張した。

結局、今後打出・芦屋は住吉川水系から引水しない。ただこのたびの破壊行為については、六か村側から銀五貫の賠償を支払う。打出と芦屋はその銀を元にして溜池を築いて水不足に備える。以上の条件で話しあいがついたのは、文政十年（一八二七）も秋の十一月だった。

清流の道

住吉川の河川敷には、住吉浜町や魚崎浜町など埋立て地の建設に際して、山地の土砂を海岸に運ぶダンブカー専用道路が築かれていた。その道路は埋立て工事完了ののち、昭和四十九年（一九七四）六月九日遊歩



ドビワリ周辺略図（『歴史と神戸 65』1974年より）

道に変身して区民に開放され、今では「清流の道」の愛称で親しまれている。

上流の白鶴美術館付近から、菊正宗酒造記念館前の島崎橋まで、約二・七km。川のせせらぎを聞きながらの散策コースだ。早朝や夕方には、ジョギングを楽しむ人も多く、下流の島崎橋左岸には、「健康ひろば」が設置されている。また、昭和六十一年（一九八六）三月には、上流の新落合橋付近に河川公園（清流の道公園）が整備された。

阪神・淡路大震災で、清流の道も地割れ、護岸の崩壊などの被害をうけたが、水道が復旧するまでの間、住吉川は区民の生活を支えた。その経験を踏まえ、都市防災機能を高め、また、より親しめる河川として改修工事がおこなわれ市民のやすらぎの場となっている。

清流の道



覚浄寺

魚崎南町七丁目八
市バス魚崎寺前

国道四十三号線ぞいに立派な本瓦葺きの伽藍を見せていた覚浄寺は、浄土真宗西本願寺末で、山号を雀松山といった。古くは福寿寺と称していたともいうが、開基・創立年代は不詳。阿弥陀如来を本尊とし、本堂は延享三年（一七四六）の建築だと伝えられてきたが、平成二年（一九九〇）の改修に際して、延享三年に泉（あるいは白水）新村の瓦師「徳兵衛」と「藤助」とによって作られた銘のある瓦が発見された。この本堂は、特に内部の彩色の装飾がみごとだったが、阪神・淡路大震災で倒壊したことがおしまれる。

明治六年（一八七三）に創立された魚崎小学校は、はじめこの寺の庫裏を借りて、「魚崎小学」として開校された。これを記念した石碑が、境内に立てられている。

踊り松地蔵

深江本町三丁目・深江橋たもと
阪神深江駅

もとの西国街道の浜街道が、高橋川を渡っている東

北の角にある。むかし踊り松あたりに散在していた石仏や五輪塔などを、付近の市街地化の進行にしたがつて、一か所に集めまつたものである。大部分が近世の一石五輪塔だ。



踊り松地蔵

旗振り山

金鳥山の北の火見やぐらのある山上を、旗振り場とよんでいる。近代的通信機関の整備されるまでの通信の場で大阪堂島の米相場も、このような旗振り場の手旗を通じて伝えられていったという。大阪・尼崎・武庫川堤・金鳥山・錠山・須磨などに、その中継地があった。

さらに古くさかのぼって、非常を知らせる古代の烽場ではないかとも考えられる。

稲荷筋

阪神電車の深江駅東の、南北に走る道路を稲荷筋とよぶ。かつては毎年の卯の葉祭りの日に、稲荷神社から、お旅所となった大日靈女神社まで、天狗・神輿・三台のダンジリ（森・深江・青木）が、この道を華やかに行列した。そして道の両側に、露天の店がたくさん出て市のようにだったという。この行列も、昭和の初めにすたれてしまった。



金鳥山附近からの昔の本山附近（北畑会館提供）

庚申塚

住吉本町三丁目十
市バス住吉本町三丁目

古来、中国思想の影響を受けて十干（甲乙丙丁戊己庚辛壬癸）と十二支（子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥）を組み合わせて六十通りの干支を作り、年と日に一つづつ当ててきたが、そのうちの六十日に一度の庚申（コウシン＝かのえ・さる）の日の夜に

は、眠っている間に体内にいる三三という虫が体から出て昇天し、天帝にその人が行った悪事を報告に行くという道教の教えがあった。この教えが伝わり、日本でも中世末期から人々が集まって庚申講を作り庚申の夜に徹夜で語らい、飲食する風習が行われるようになった。庚申講では、江戸時代には六本腕の青面金剛を刻んだ碑を建てたりしている。六十年ごとの庚申年に碑を建て替えるところもあった。

この住吉の庚申塚の上の碑には



庚申塚

「南無聖面金剛」とあり、伝承によると、住吉村山田の横田五兵衛がここに系図などを埋めて、先祖を孝信のための孝信塚を築いた。その三代後の当主が庚申信仰を持っていて、それを庚申塚と改めたという。碑銘によると、こうして寛永二年（一六二五）に彼が庚申講の人々とこの碑を建てたようである。

水神宮

御影郡家二丁目三
阪急御影駅

弓弦羽神社参道と山手幹線の合流点の西、昔からの水路の脇にある。農業用水を確保するため、各地で水神に対する信仰は大きかった。この水神宮は、『御影町誌』によると、弓弦羽神社の境内末社として弘化四年（一八四七）に祭られたという。

みとなった。山号は影向山ようこうざん、真宗大谷派の末寺で、本尊は阿弥陀如来である。

常順寺

御影本町二丁目十五
阪神御影駅南

寛永十二年（一六三五）僧玄清の開基と伝えられ、大阪の難波御堂末を経て、東本願寺末となった。御影の発展とともに隆盛し、明治初年には本堂・鐘楼・太鼓堂などを備える寺院となった。当時、寺は御影町上中（本通北側・西方寺西側）にあったが、明治二十五年（一八九二）の御影の大火で消失し、同三十九年（一九〇六）に現在地に移って再建された。戦災による被害はなく、再建当時の伽藍を残していたが、阪神・淡路大震災で本堂・玄関・鐘楼・書院などが全壊する大被害を被り、再建当時に忍ばせるのは山門の彫物の

神戸深江生活文化史料館

深江本町三丁目五
阪神深江駅前

大日霊女神社の東隣にある、くらしの歴史の博物館。旧本庄村の史誌の編纂過程で収集された生活資料を保存し展示するとともに、地域の歴史研究やその成果の普及のため、昭和五十六年（一九八一）に深江財産区によって設立、昭和五十八年（一九八三）に拡張された。深江で古くから医業を営んできた深山家をはじめ、多くの有志から寄贈された数千点に及ぶ文献資料、生活資料を、「くらしの道具」、「深江の浜の道具」、「深山医事資料」などのコーナーに分けて展示している。「いろりのコーナー」では、昔のくらしがわかる資料が数多く展示されている。（160ページ一覽表参照）



生活文化史料館展示室（神戸深江生活文化資料館提供）